



Title	ソ連中央アジア創成期におけるクルグズ人旧首領一族の動向 : 民間所蔵史料と公文書館史料による復元の試み
Author(s)	秋山, 徹; AKIYAMA, Tetsu
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 98-99
Issue Date	2019-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.15.98
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88372
Type	journal article
File Information	JB015_010akiyama.pdf

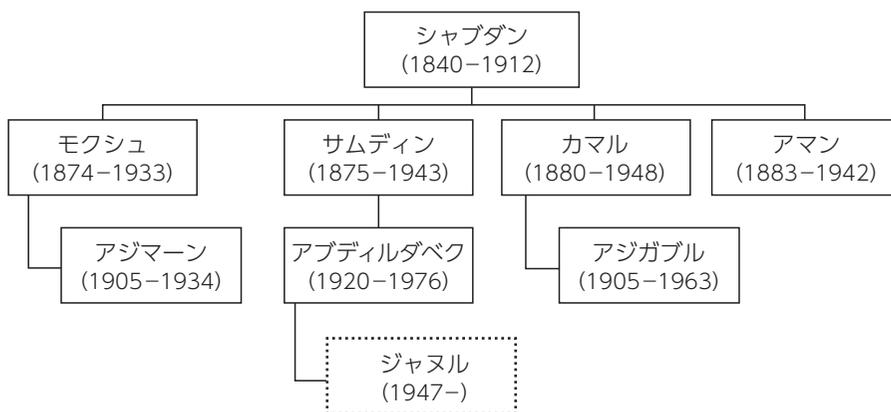


ソ連中央アジア創成期におけるクルグズ人旧首領一族の動向 — 民間所蔵史料と公文書館史料による復元の試み —

秋山 徹

ソ連邦の解体から四半世紀が経過するなかで、中央アジア現代史の実証的解明が進められてきた。このなかで脚光を浴びるようになったのが中央アジア現地エリート、なかんずく民族知識人であり、これまで豊富な成果が蓄積されてきた。他方で、在地社会の伝統的な有力者層の動向については依然として未解明の部分が多い。中央アジア、なかでも遊牧民地域が近代化の途上にあったことを考慮すれば、現代国家の形成過程において彼らが果たした役割を無視することはできない。むしろ、集団化をはじめとする在地社会の社会主義的再編において、彼らが「封建上層」や「階級の敵」として厳しく糾弾され、最終的に実質的な権力を喪失していったことはたしかであるとしても、そのプロセスが、果たしてソ連政権の思惑通りに単線的に進展したのか、実証的解明の余地が残されている。こうした問題意識を念頭に、本報告は、ロシア帝政期の有力クルグズ人首領シャブダン(1840-1912)の子孫に着目し、ロシア革命期から1950年代後半に至る約40年間における彼らの軌跡を、公文書館史料(クルグズスタン、カザフスタン、ロシア)ならびに子孫に伝存する私蔵文書、それらに加えて、子孫へのインタビューにもとづくオーラル・ヒストリーを用いて復元することを試みた。

本報告は、時系列に沿うかたちで、以下に示す四つの部分から構成された：1. 中国領へ



の移動・帰還；2. 流刑への途；3. 流刑帰還後の兄弟：モクシュとカマル；4. 孫たちの動向：アジマーン、アジガブル、アブディルダベク。第1部、「中国領への移動・帰還」は、ロシア帝政の瓦解が始まる1916年から1921年におけるシャブダンの息子たちの動向を検討した。彼らは、1916年反乱においてセミレチエ南部における指導的な役割を果たし、中華民国統治下の新疆に移動したことが知られている。本パートでは、1919年末から1921年にかけて、ソヴィエト権力側が、難民の帰還・定着事業を進めるうえで、カマルを筆頭とするシャブダンの息子たちを、居住地と身の安全保障と引き換えに、その仲介者として活用していたことを明らかにした。第2部「流刑への途」は、1921年から1926年までを扱い、中国領からソ連領に帰還した彼らが最終的にウラルへ流刑に処されるまでの過程を検討した。1920年代中期、スターリンによる権力掌握と連動するかたちで、上からの強いリーダーシップのもと、キルギジア現地においては、旧部族首領層マナブに対する撲滅キャンペーンと流刑が進められていった。にもかかわらず、そうしたなかであって、シャブダンの息子たちが、ロシア帝政期からの旧知の間柄で、当時ソ連政権において要職を占めていたブロイドに流刑決議の破棄を要請し、実際に同決議を一旦破棄に追い込んだことを明らかにした。第3部「流刑帰還後の兄弟」は、おおよそ5年間の流刑を経て1930年代初頭にキルギジアへ帰還して以降のシャブダンの息子たちの動向を、対照的な生涯を送ったモクシュとカマルに焦点をあてて検討した。モクシュが、キルギジア帰還後も共和国南部の中心都市オシュのラーゲリに送られ、獄死していった一方で、カマルは、第二次世界大戦状況下におけるソヴィエト権力の対イスラーム融和策のもとでその存在が重視され、1944年に中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務管理局の「カーズィー」に任命されるなど、要職に取り立てられていたことを明らかにした。第4部「孫たちの動向」は1930年代～1950年代後半におけるシャブダンの孫たちの動向を、アジマーン、アジガブル、アブディルダベクに焦点を当てて検討した。彼らは父親たちと同様に、共和国内流刑、そしてアジマーンに至っては肅清という宿命に甘んじることを余儀なくされたものの、他方において、ソ連政権は、民族文化や民族言語の創出をはじめとして、彼らを民族共和国の建設に利用しようとしていた側面もまた明らかとなった。以上の考察から、ソ連政権下におけるシャブダンの息子たちのみならず孫たちの処遇は概して「抑圧的」なものであったことはたしかである。しかし、その過程は決して単線的とはいえない、葛藤と紆余曲折を孕んだものであり、その中に彼らの生存戦略を見いだしてゆくことも可能である点をむすびとして指摘した。

(早稲田大学高等研究所)